
四の姫と薬草使い～恋敵はヒゲのおじさん!?

十海 with いーぐる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

四の姫と薬草使い～恋敵はヒゲのおじさん～？

【Zコード】

Z3799Z

【作者名】

十海 with いーぐる

【あらすじ】

シンデレラ姫が恋をした。お相手は「天然わんこ」騎士。立ちふさがる恋敵は何と、無自覚キートなおじさん！「負けるもんですか。絶対、『私の騎士』を取り戻す！　真っ当な道に引き戻してあげるんだから！」　翼ある猫は梁の上、ひつそりもつふりうづくまる。もわもわとしつぽをふくらませて……嵐の予感がした。　さつくり読めてほっくりあつたかい、ちょいすれ系ユーモアファンタジー第一弾。

【1】彼氏だなんてウソでしょ！？

ド・モレッティ伯爵の居城は、西の辺境を統べる西都ヴェスタポートにある。

彼が団長を務める西道守護騎士団の本部もそこにあるからだ。普段は家族ともども西都の城に住んでいるが、月に何度かはAINヘイルダールの駐屯地に赴き、皆にほど近い場所に建てられた別館に滞在する。

団長なのだから当然の務め。その間は奥方とも、四人の可愛い可愛い可愛い（以下略）娘たちとも離れて過ごさなければいけない。幸い、ここ1年、2年は長女の一の姫ことマイラが女領主としての才覚をめきめきと表してきたこともあり、彼女に城をまかせて奥方を伴うことも増えてきた。

しかしながら、やつぱり娘と離れるのは父親として寂しいらしい。

だがこの春、ド・モレッティ伯爵の寂しい単身赴任に若干の変化が出てきた。

正確には、春にAINヘイルダールで行われた馬上槍試合を境目に。

何と。引っ越し思案で滅多に城から出たがらないはずの末娘が。四の姫」と一コラが、こんな事を言いだしたのだ！

「お父様！ 次のAINヘイルダールへの出向、私も一緒に行つていい？」

「もちろんだとも！」

四の姫一コラは、小さな頃体が弱かった。そこで一時期AINヘイルダールの別館で育てられていた。

何となればこの町には、世界を支える大いなる力の流れ、すなわち『力線』が通っている。

その影響で土地の力そのものが活性化し、土地に根付く草木も、生き物も、みなすくすく丈夫に育つ。

力線の恩恵を受け、「コラは健やかに育ち、丈夫で元気な娘に成長したのだつた。

ちょっとばかり元気になりすぎた感が無きにしもあらず。だが、そこは親のひいき目。

揺り籠の中でかぼそい声で泣いていた青白い赤ん坊が、今や薔薇色の頬で駆け回っているのだ。

笑顔にもなるひと言つもんである。

ド・モレッティ伯としては、幼少時代を過ごした懐かしい町で過ごしたいのだろうな、ぐらいにしか認識していなかつたのだが。

四の姫も御年14才。男親の予想の斜め上をぶつ飛ぶお年になる。アインヘイルダールを訪れる目的は、きつちり別にあつた。

毎日のようにさりげなくおしゃれをして……ちらちらした金色の髪の毛には入念にブラシをかけ、顔も手も丁寧に洗い、マイラ姉様からもらった薔薇水をすり込んで入念にマッサージ。

口紅はまだ早いから使わせてもらえないのがちょっと残念。お気に入りの水色のリボンを結んで、いつもよりほんの少し裾を長く、ウェストを絞つて、袖を膨らませたドレスを着る。

そして、足取りも軽やかに向かう先は西道騎士団の砦なのだつた。それほど時間はかかるない。ド・モレッティ伯の館からは地続きだし、ほとんど離れていないから、お供を連れて行く必要もない。お父様に会いに行きます、と言えば、婆やも爺やもあつさり行か

せてくれる。

しかしながら、一ノリ姫が向かうのは団長の執務室ではなく……
若い騎士たちのたむろする屯所なのだつた。

さりげなく通りかかつたふりをして尋ねる。

「ティーンドルフはどう?」

声をかけた相手は、訓練所を卒業して先月配属されてきたばかりの若い騎士たち。年も近いから何となく話しやすかつたのだ。

『あ、女の子! 女の子だ!』

『だれ?』

『団長のお嬢さんだよ。伯爵家のお姫様だよー。』

ざわめく少年たちの中から一人、銀髪の騎士がすうっと進み出で、
答えてくれた。

「aign先輩なら、厩舎ですよ」

「ありがと!」

ドレスの裾を翻して駆けて行く。

屯所のすぐ裏手、中庭に面した広い厩舎には、騎士たちを乗せる馬がずらりと並んでいる。どの馬も筋骨隆々とたくましく、鼻面からして幅広い。筋肉の盛り上がった四本の脚は、丸太みたいだ。

ぶるるる。

ぶひんつ!

巨大な生き物の声と、におい、体から発する熱のこもった通路を

歩いて行く。

彼がいるのは……正確には、彼の馬が居るのは、一番奥だ。

『ディートヘルム・ディーンドルフは上着を脱いで腕まくりをして、藁まみれになつて馬の世話をしていた。

『を引くのは兵士の仕事、武器の手入れと馬の世話は従者の仕事……なんぞとのんきな事を言つてらるのは王都あたりの恵まれた騎士さまなればこそ。

西の辺境では、自給自足が基本。全て自分でやらなければいけない。自らペッチフォークを振るつて馬房の寝わらを交換し、飼い葉をあたえ、水を飲ませるのだ。

「ディーンドルフ！」

「やあ、レディ・二ノリー！」

くつたぐのない笑顔で出迎えられる。じつせん、じつせんと炒つた豆みたに飛び跳ねる心臓を押さえ、つこつと顎をそらせた。

「あなた、隊の子たちにダイントて呼ばれてるのね」

「あー、ほり、長じて名前は叫びづらいから

うん、知ってる。名乗る時もこつもやうだつて。

『ディートヘルム・ディーンドルフ。通り名はダイントだ。好きなよ』

『呼べ』

「何だったら、君も呼んでいいだ。ダイントで

「いいでしょ」

鷹揚につなづく。

だけど言えなかつた。

「わたしの事も」「うつて呼んで」とは。
レディつて呼ばれるのが嬉しいからつてこともある。だけどそれ
以上に、恥ずかしかつた。照れ臭かつた。

「ふふーつ！

なまあつたかい風が顔をなで、髪を舞い上がりせる。

「ひやつ」

（ひやつて何！ もつと可愛い声出せないの？ ああもう私のバカ
つー）

「うーん、黒ー！」

ぬうつと伸ばされていた馬の鼻面を、ダインの手が軽く叩く。

「こいつ、『婦人にはやたらと愛想が良くなつて』
「よひしいんじやないの？ 騎士の馬として相応しい礼儀じやなく
て？」

（しまつたあー！）

「うーんはーうつそり、首をすくめた。

（何、えらそなこと言つてるの私つてばかわいげないーつー。ぜ
つたい、生意氣つて思われた。わあん、ビうじょう、ビうじょう、
どうしようつー！）

「ははつ、それもそだなー！」

笑ってる！

「これから、ひとり走りする所なんだ。よろしければ、『』一緒に……」

「行く、行く、乗りたい！」

手際よくダインが馬具をつけるのを見守った。

「……よし、準備完了！」

手綱をとつて厩舎から出ると、ダインは身軽にまたがった。

（え、え、何、一人でさつと行つちやうつもり？ 乗せてくれないの？ 自力でよじ登れつてこと？）

小山のような黒馬を見上げて途方に暮れていると……田の前に、手が伸びてきた。

「おいで、レディ・リカラ」

夢見るような気持ちでつかまつた。差し伸べられた、逞しい手に。ふわっと体が宙に浮き、あれつと思つたらもう鞍に座りされていた。

「うわっ、た、高い！」

馬に乗るのは始めてじゃない。だけど自分が今まで乗つてきた華奢な馬とは、全然違つていた。

まるつきつ別の生き物だつた。まるで船だ。生きた船だ……。びつくつしたけれど、怖くはない。後ろから抱きすべめるよつて

して、ダインがしつかり支えていてくれるから。

「しつかりたてがみに掘まつて」

耳の後ろで声がする。あの時と同じだ。
馬上槍試合で、勝利の行進をした時と。

「い、こう?」

「やうやう、上手、上手。それじゃ、行くぞ。」

丸太のような脚が地を蹴り、走り出す。

どおん、どおんと蹄が大地を穿つ音が轟く。それなのに黒い馬は
軽々と走り、まるで重さを感じさせない。空を飛ぶついでに、時々
地面を蹄で蹴つているようだ。

「怖いか?」

「つうん、いい気持ち。」

「せうか、レディは乗馬の素質あるなー。」

皆の周りを一周する間、一ノリはふわふわと雲の上を走つている
ような心地だつた。

中庭に戻つてきて、優しく抱き下ろされた時も、ふわんふわん。
強い風に吹き流されて髪の毛も、ドレスもくしゃくしゃだつたけ
ど気にしない。大きくてあつたかい、がつしりした手が撫でてくれ
たから。整えてくれたから。

「櫛、ないから、ここまでしかできないけど」

「いいの。ありがと」

「つとつしたまま館に戻つてふと氣付く。そつとお父様の部

屋に行くの、忘れてたって。

(ま、いいか)

こんな調子でアインヘルダールに滞在している一週間の間、四姫は一日も欠かさず騎士団の皆に通い続けた。
ひたすら『私の騎士』に会う為に。何か妙だなとは思ったものの、モレッティ伯爵も深くは追求しなかった。

娘と過ごす時間が増えるのは、彼にとつても嬉しかったからだ。たとえ、他の目的があるとしても。

入り浸ると言つても騎士団の皆の中だ。周囲にいるのは全て自分の部下。やしたる危険もなからつと……。

次の出向にも、一回は進んで父親に同行した。
ひと月ぶりにアインヘルダールにやつて来て、さっそく屯所に行つてみたら、ダンがいなかつた。

(また黒の世話してゐるのね?)

厩舎をのぞいてみたら、何としたことか。黒馬の姿まで消えている!

大慌てで屯所に引き返し、息せききつて尋ねた。

「ディーンドルフはどう?」

居合わせた騎士たちは顔を見合わせ、微妙な表情で答えた。

「あーいや、その、ちょっと外出を」

「今週はあいつ、非番ですからね……」

「そう。どこに行つたかご存知?」

「え、あ……と、友だちのとこ、かな?」

「そう、友だちー。友だちの家ですよー」

そろいもそろつて奥歯に物の挟まつたような言い方で、決して目を合わせようとしない。

つぴーんつと少女の頭の中で鋭い光がはじけた。

(おかしい。おかしい。絶対、ただの友だちじやない!)

「あのー」

進み出たのは、銀髪の新米騎士。先輩たちが慌てて身振りやら田配せで止めようとするが、一向に気にする風もなく、むりりときつぱり言い切つた。

「aign先輩なら、彼氏の家に泊まり込んでもますよ

「何ですつてええええ!」

「はー。じいんとこ非番の週は、いつも」

ぐわわわわあんつと、二�の頭の中で鐘が鳴つた。

(か、彼氏つてどう言つーとー。恋人? 恋人なの?)

私の騎士に、恋人がいた。それだけでもショックなのに、更に、よつて男が相手だなんてえ!

「……ビルなの」

「つむき、ぶるぶる震えながら問いかけた。地の底から轟くような、低うい声で。

「はい?」

「ダインが泊まり込んでる家。ビル?」

「薬草店です。北区の裏通りにある」

「そう、ありがとう」

それだけ聞けば、充分だつた。
くらくらする頭を抱えて、どうにかその場を立ち去つた。途中、
壁や柱やらじりじりとぶつかりつづ。

四の姫が去つてから、屯所には一斉に突つ込みの嵐が吹き荒れた。
主に銀髪の新米騎士に向かつて。

「シャルダン! いら、お前、言つて事欠いて何てことを一つ」
「空氣読め!」

「だつて、周知の事実じゃないですか」

悪びれもせず、シャルダンと呼ばれた騎士は答えた。淡々とした
口調で、何でそんなに怒られるのかわからない、とでも言つたげな
表情で。

「それに、団長のお嬢さんは聰明な方なんでしょう? 下手にじまか
すよりは、正直に打ち明けた方がいいんじゃないかなって」

「ああ、確かにお嬢さんは聰明で賢いけどな……それは三の姫だ!」

銀髪の騎士は、ぱちぱちとまばたきして、顎に手を当てて首をか

しげた。

「……おやへ。」

「今お前が話してたのは、四の姫！」

「やあ、これまつかりしていました。道理で年の割に幼く見える方だなあと」

「おーまーえーはーっ！」

道理で年の割に幼く見える

【2】鳥のよつな、猫のよつな。

アインヘルダールの北区。表通りから奥へと入り、かくん、かくんと角を三つばかり曲がった先に一軒の薬草屋があった。最初の礎が打ち込まれてから優に百年は越していよつかと言つ古い家は、積み重なる年月とともに建て増しを重ね、間口の割に中は広く、ゆつたりした作りになつてゐる。

その一室。薬草屋の現店主にして家の主、フロウライイトの寝室では、当の主がベッドの下にもぐりここんでじかじかと探し物の真つ最中だつた。

何となれば、朝食を終えてさてベッドを整えようとしたといふ、昨夜被つていたはずの毛布が一枚、こつぜんと消え失せていたのだ。

最近、この家で行方不明になる物が増えている。靴下、スリッパ、クッショն、ハーブの束に上着にシャツ。どれも肌触りのよい、上質なものばかり。

「つかしいなあ……どこに行つた?」

と……その時。

じすつと天井の梁から、黒い影が舞い降りた。

じじりよじりと忍び寄り、伸び上がり、椅子の背に引っかけたフロウの上着をペシッと器用に前足でたたき落とす。

「ん?」

気配を感じた薬草師が振り向くと、金色の瞳とがち合つた。

ふわふわした黒と褐色の羽毛に覆われた、異界の生き物。猫のようにしなやかで、鳥のように翼を広げて自在に飛び回る。『とりねこ』が床の上、今しも上着をくわえてずつずつ引寄せつている所だった。

「ちび……」

田が畠のとくわえていた上着をぱたりと離し、ちょいこと小首をかしげて、愛らしい声でひとこと。

「ひゃ？」

「おーよしよし、可愛いなあ」

「ひゃ、ひゃ」

のそのぞとビシドの下から這い出しそ、床の上にあぐらをかく。ちびは畠を『じりじり』鳴らして愛らしさを全開。ぐごぐごと顔をすり寄せ、ひだに乗つてくる。

「……ちーびーーー。」

すかさず、むんずつとばかりに首根っこを捕まえた。

「お前か！ お前が犯人かーー！」

「ひゃーー！」

「毛布どこの持つてつた。ああん？」

べたーっと耳を後ろに伏せてしまつた。のぞむフロウの視線から畠をそらし……何やら戸棚の上を見ている。

「……」

踏み台を持つて行つて、上がつてみると、あつた。

とりねこ の、巣。

クッショニ に、毛布に、見当たらな いなと思つて いた乾燥ハーブが一束。かたつぼだけになつてたスリッパの片割れも。即座に回収する。

「ちーびー」

「ぴやーつ」

しつぽをぶわぶわに膨らませ、逃げよつとするのを、素早く襟首ひつつかまえてぶら下げる。

「つたく油断も隙もあつやしねえ。巣一作るのは自由だが、勝手に人のものを持つてくなー！」

「ぴい」

ちびはしょんぼりとつな垂れた。

不完全ながらも『とりねこ』は人の言葉を理解して いる。言え ば ちゃんと通じるはずなのだが、時々わかつてやらかすから始末が悪い。

と。

やにわにぴつと耳を起こし、しつぽを立てた。

來たな？ 思つ間もなく開け放したドアから、ひょっこりヒダインが顔を出す。

「とーちゃんー！」

「よつ、ちび。今度は何やらかした？」

「ぴーー！」

「しまつた奴ー！」

「ぴやあ」

（あーあ。でれんでれんにゅるんだ顔しゃがって、ぜんぜん叱つて
ないぞ、お前さん……）

「なーフロウ。俺がタベ着てたシャツ知らないか？」

シャツが無いからか、素肌の上にこきなり上着を羽織つていた。
黒を基調とした実用本位の詰襟、西道守護騎士団の制服を。

「どいつて……脱いだ場所にあるだろ普通」

「うん、見たけどないんだ」

「あー、つてことは……」

「ぴいい」

だりーんとぶら下げられたまま、ちびはちらつ、ちらつとベッド
の下に視線を走らせてくる。面白したも同然だ。

「……ベッドの下」

「え、そんなどこに？ 何で？」

「いいから。ちびに聞け」

「え」

ダイソウが「んん」とベッドの潜り込む。ほどなくして。

「あーーー」

「あつたか」

「……うん」

ちびはべつと耳を伏せ、素早く梁の上に飛び上がった。半分は翼、

半分は脚の力で。

入れ替わりにのつせつとダンが出てきた。手に変わり果てたシャツをつかんで。

「あーあ……よくまあ、しゃべれやがって、ここはー。」

前足でほりくつほりくつやらかして、ひもひもひもひも吸つてたらし。

「うーわー、羽根と毛が……」

ちびは素知らぬ顔で梁の上にのづくまつ、じつと金色の皿で見下るとしている。
もはや反省の色は欠片もない。

「災難だつたなあ」

「洗つてくる」

ため息一つつくと、ダインはシャツを片手にトントに降りて行く。フロウも一緒に階段を降り、裏庭に面したドアへと向かう青年の背中をぽんと叩いた。

「とーちゃんの匂いがするし。洗いやらしどこに感じにくたくたになつてたし。いーに巢材だと思つたんだわつよ」

「つたぐ。しうがねえなあ」

田尻じゅトがつていたが、口の端はゆるんでほんの少し上がつてゐる。

つまり、根本的には困つてないつてことだ。

「そーだな、お前さんの猫だもんな」

したり顔してうなずきつつ、せりげなく毛布と靴下を押し付けた。

「つこでこいれも頼む」

「おひ」

騎士さま満面の笑みを浮かべ、いそいそと井戸端に歩いてく。わざわざ揺れるぶつとこしつぽが見えそつた勢いだ。

(つべづべ素直なワソコだねえ)

かすかに空気が揺れたと思つたら、とんと肩に柔らかな生き物が舞い降りてきた。

「ひや、ひやー。」

上機嫌で体をすり寄せてくれる。

既にちびの頭からは、フロウに叱られたことも。自分のやらかしたあれやこれやの記憶も、まとめてきれこわぱり抜け落ちているらしい。

それじゃ『つ』のよひ。『ね』のよひ。

「んじや、まひひひひひ店開きと行きますか

居間を通り抜け、ドアを開けて店に入る。

商品の棚を覆っていた布を外し、カーテンを開け、窓のよひをあげる。既に日は高々と上がっていた。差しこむ陽射しの眩しさに、思わず知らず目を細める。

その間、ちびはフロウの肩に乗つたり、足下をすり抜けたり、はたまた天井の梁に飛び上がつたりとしたい放題自由自在。

最後にドアの鍵を開け、「OPEN」の札を出して準備完了。カウンター奥の気に入りの椅子に陣取り、ほつと一息……つく間もなく、バターンとドアが開いた。

「お？ いらっしゃい」

少女が入ってきた。すかすかと大股でまっすぐに、金色の髪を逆立てて。

（……何だ？）

天井の梁の上からちびがじつと見下ろしている。耳を伏せ、ひつそりしつぼを膨らませて。嵐の予感がした。

【3】姫、参上！

四の姫はすんずん歩く。閱兵式をながらの規則正しい足取りで、すんずん、すんずん一直線に、まっしぐら。

水色のリボンをなびかせて、さらりと癖の無い金髪を揺らし、おろし立ての赤い靴を履いた両足を、前へ前へと蹴り出して。

「口うことつて、アインヘイルダールの街は幼年期を過ごした、慣れ親しんだ場所だ。

北区と言われてすぐにどこにあるかわかつたし、迷わず正しい道を選ぶことができた。だが、さすがに表通りを外れるのには勇気が要つた。

建物と建物の間を通る細い道は、壁に日光が遮られるせいか、うつすらと暗い。

「そここの細い路地を、道なりにまつすぐ、道なりに……」

つい先ほど、屋台の女主人から聞いた道順を呪文のように繰り返す。

商売柄、件の薬草店をよく利用してゐる。『いたばんの近道なのよ』と言つていた。

壁と壁に挟まれたほの暗い道は、見渡す限りまつすぐ伸びている。まつすぐすぎて、どこまで続いているのかわからない。

（「の先に、aignがいる。私の騎士がいる）

（あやしげな薬草師にたぶらかされて、店に入り浸つてゐ。しかも

相手は男！）

「へと歎を鳴らすと、口うは拳を握り……えいやつと踏みだ

した。

ほんの少し手を広げれば、指先が左右の壁に触れてしまいそうな
くらいい細い道を、前へ。前へ。ずんずん前へ。

（どんな美少年でも美青年でも負けるもんですか！　aign、絶対、
あなたを取り戻す！　真っ当な道に引き戻してあげるんだから！）

氣勢を上げたその瞬間。唐突に細い道は終わり、ぼこんっと飛び
だしていた。何の前触れも無く、左右に横切る広い道に　それに
したつて表通りに比べれば狭いのだけれど。

『下半分は石造りで、上半分は木でできた古い家だよ。看板が出て
るから、すぐにわかるし裏には薬草畠があるからね。鼻が教えてく
れるよ』

屋台の女主人の言葉を思い出し、すーはー、すーはーと大きく、
深く、息を吸う。

「あ

混じり合つ花と草の香りがした。毎日飲むお茶や、家の中に掲げ
られたリース、料理に使うスパイス、そして怪我に塗つたり、病気
の時に飲む薬。そして、今朝使つたばかりの薔薇水の香り。

においを辿り、ほどなく古い木のドアにたどり着く。ぴかぴか光
る真鍮の取つ手。軒先に下がる木彫りの看板には、流れるような書
体でこう書かれていた。

『薬草・香草・薬のご用承ります』

（まちがいない。ここだわ！）

だんづと脚を踏ん張ると、ニーハ・ズ・モレツティは胸を張り、勢い良くドアを開けた。

田に見える場所ほどんど全てに、ガラスの瓶が並んでいた。掌に収まるほどの小さな物から、両腕でやつと抱えられるくらいの大きなもの、その中間を埋めるあらゆるサイズの瓶が。中味は乾燥した花やつぼみ、粉末や水薬、あるいはオイルに漬けた葉や茎、実、根っこなど。台所のスパイス棚にちょっとぴり似ている。だけどずつと数が多くかった。

高くそびえた天井に張られた紐からは、乾燥した草の束がぶら下がっている。

そして押し寄せてくる香りの渦は、干され、混ぜられ、練り上げられて。生の草や花よりずっと濃く、強かつた。

日なたと牧場まきばと蜂蜜のにおいが溶け込んでいた。

「お? こりつしゃー」

「…………」きげんよつ

奥のカウンターに座っていた男が顔を上げ、声をかけてきた。

とつそこに挨拶を返しながらも、ニーハは正直、面食らつた。

(だれだらう?..)

むちとした体つきは、どこか子犬を思わせる。

ぱつちつした一重の瞼に蜂蜜色の瞳、ふつくらした唇、つやつやした頬はつつすらとヒゲに覆われていて、大人なのか、子供なのかよくわからない。

(まさか、この人がダンの『彼氏』？)

見た所、他に店員の姿も客の姿もない。一人つきりだ。

恋敵（不確定）の前を通り過ぎ、商品の並ぶ棚の前に立つた。ガラス瓶に入った草や花を一つ一つにらみながら、隙を見てちら、と振り返る。

思ったより背は低かつた。美青年でも、増して美少年でもない。だけど、何故か目が引き寄せられてしまう。じーっと見つめていたくなる。

見ないふりして視線をそらしても、気になつて、気になつて、しかたない。

(どうして？ やつぱり顔？ 顔なの？)

気配を感じたのか、男がこっちを向いた。あわててさつと視線をそらし、ガラス瓶をにらみつける。

(あ)

とりと濃い褐色の水薬が満たされた瓶は、まるで鏡のように背景の景色を写していた。こっちの表情も、目線の動きも、全て。

(見られてたーつ！)

瓶に写る男と、目が合つた。

合ひてしまつた。

「何かお探しですかい？ お嬢さん。」

「わっ！」

その場で飛び上がりそうになつた。いや、ひょっとしたら知らないうちに飛び上がつてしまつたのかもしれない。近くの棚がカタンと揺れたから。

（落ち着くのよ、ニコラ！ 元々、この人と対決するために来たんじゃないの！ 逃げてはだめ。逃げてはだめ。私は、騎士の娘だものー）

意を決してぱっと振り向いた。勢いで金色の髪が舞い上がる。

「……私の騎士がここに来てるはずなんだけど？」

「騎士？」

男は怪訝そうな顔をしたが、すぐにああ、と小さくうなずいた。

「ワインなら、裏の井戸、んとこさね」

「そんなところで何を？」

「んー、洗濯。飼つてる猫がやらかしたから、飼い主の責任つてやつでな」

「猫、飼つてたんだ……」

「ああ。皆だとうるわしく騒いで迷惑かけちまつからな。俺が預かってるけど、飼い主はワインだ」

「つてー！」

はつと気付いた。気付いてしまつた。

「だ、aignって、あなた彼のことaignって、なれなれしい一つ！」

「ん？ だつてアイシの名前長くて面倒じゃねえか」

男は首を傾げ、ゆるい笑みを浮かべた。ほんの少し眉を寄せ、困ったような表情が混じっている。

「皆そう呼んでるだろ？」

「そうだけど」

『あー、ほら、長い名前は言いづらいから』

『何だつたら、君も呼んでいいぞ。aignって』

この人にも言つたんだ。あの調子で。いつもの事だ、誰にでもそう言つ人だつてわかっているけれど。

両手を握りしめる。体中に広がる震えを止めようと、必死になつて指に力を込めて……きつと顔を上げ、男をにらみ付けた。

「あなたつ、彼と、その……」

耳の奥でがん、がん、と低い音がする。

変な感じがした。確かに自分はここに立つてははずなのに、足下がふわふわして、ぐるぐると激しく渦巻く竜巻の真ん中を漂つてゐるような気がした。

（あー、こう言つのつて、えーと、何て言えばいいんだつけ、彼氏？ 恋人？ やだ、そんなこと言つたら認めてるみたいじゃないの、悔しい。もっと別の言い方探さなくちゃ……）

必死になつて知つてゐる限りの言葉を漁つた揚げ句、出でたのは。

「あなた、ダンとテキの本と？」

「え？」

どこから拾い上げてきたものか、やんじとなきレディにはこやかにそぐわぬ、ちょっとぴり下世話な言い回しだった。

男はきょとんとした顔でぱちくり瞬き。皿をまんまるにして、肩をすくめた。口の真ん中に力を入れて、こすりとくちばしまみたいに突きだして。

「……まあ？」

いい年の大人がやつてる仕草だ。冷静に考えれば、笑っちゃう（それも苦笑の類い）はずなのだが。

予想に反してこみ上げてくる感情は……

（何つ、何なのこの可愛さはつーー）

まるでモモや藁の中で動くヒヨコか、草むらにもぐつこむ子犬を見ている時のよがな、何ともくすぐったい愛おしさなのだった。見てるだけで、撫でずにはいられない。さわりたくて指先がむずむず動いてしまうくな。

（負けてる、負けてる…）

「え、まだまだ勝負はこれからー。氣力を奮い起しよと田の姫一囃はつこと顎をそらせ、田を細めた。

「わかつたわ、質問を変えます」

知つている限りの堅い言葉を選び、抑揚のない声で問いかけた。

「非番の週に、aignがここに泊まり込んでいふのせ事実ですか？」

「ああ、それはまあ……確かに、休みになるたびにしつこい詫ま
りに来てるね」

帰ってきた答えの中味とさりげない口ぶりに、仮初めの冷徹はあ
つさりと溶け崩れて消えた。

「つーじぱーせ」

生まれたての子鹿のよいこふねふねと震えながら、二口は男の顔に手を伸ばし、頬をついた。

「……なんだよ」「

ふにん、と指がほどよく沈み、次いで押し返される。何と言つか、たいへん触り心地がよい。

11

(まあ、まさか、いつちも?)

恐る恐る手を下に滑らせ、着崩したシャツの上からせぐ、むづち
り盛り上がっているのがわかる胸を突いた。

「……だから、なんだよ」

むにゅん。

やつぱり指が押し返される。張りのある肌と皮膚と、肉に。ぺたつと手のひらを並べてみると、もつちつと握れるほどどの質感があつた。

もつ片方の手で自分の胸をなでると、つるぺたすとーんつと一気に腹まで落ちてしまった。

（何で試したりしたんだろう。わかりきつてたことなのに！）

涙を浮かべると、二口は恥も外聞も意地もかなぐりすて、握つた拳でぽかぽか叩いた。自分なんかよりよっぽど豊かで、触り心地のよい胸を。

「こやだからお譲りやん！ 一年じいの娘さんが乳とかそんなもんないだろー！」

呂が呂へせじ、ほよべ、まじめこと拳が跳ねる。それがまたさ
ういふかあ立つ。

「ちよ、なつ！？ 一体なんなんだよつー？！」

—するレ、
「かねて」

「あーセう、しょうかねえなあ

ぼすつと頭の上に手が乗せられ、撫でられた。

完敗だった。

いつそ、思いつきり冷徹でナルシストな美青年とか。やたら生意

氣な美少年だつたら、その未熟さ、器量の狭さを見下し、自分が優位に立つこともできただろうに。

（これじゃ、嫉妬もできなによお……）

やれやれ、どうしたものか。

薬草師フロウはため息をついた。

飛び込んできた金髪の少女は、どうやらaignの知り合いらしい。身なりもいいし、言葉遣いもきちんとしてる。いい所のお嬢さん、それもしっかりした教育を受けてる娘なのだろう。

それがいきなり『私の騎士はどうへ』『aignヒートキてるの?』と来たもんだ。

（つたく、あの無自覚天然タラシにも困つたもんだ……）

えくえく泣きじやくる少女をなだめる一方で、フロウはある事に気付いた。

「えつ？」

店で扱つているのは、薬草や香草ばかりではない。専門の店に比べればほんのわずかなものではあつたが、魔術の触媒や術具も置いてある。

その術具を並べた一角が、さつきから騒がしい。

少女の感情が昂ぶる度に、カタカタとケースの中を揺れてい。地震かとも思つたが、他の物はびくともしてい。ただ、揺れているのではない。微妙に活性化しているのだ。どこからか注がれた

魔力によつて……。

自分ではない。こう見えても魔術師の端くれだ。無意識に魔力を漏らすような事は滅多に無い。使つてない自覚もある。

ちびでもない。

さつきから天井の梁で息をひそめ、ひたすらつづくまつてゐる。当然、aignでもない。だとすると、残る可能性はただ一つ。

(まさか、この子が?)

【4】騎士、登場。

「んびゅーつー。」

天井の梁の上で、何かが甲高い声で鳴いた。
見上げると、そこに居たのは黒地に褐色の斑模様に金色の瞳の猫
だつた。つぶーんとしつぽを立てて、翼を広げ、奥に通じるドアの方を向いていた。

「あれが、aignの猫？」
「うん、名前は『ちび』だ」
「羽根生えてるけどー。」
「やう言つ生き物なんだ」

答えるフロウの額には、じつとりと冷たい汗がにじんでいた。

あの仕草、あの目つき、何が来たかは予想がつく。つべづべく間の悪い奴だ。シャツと毛布と靴下と、こんなに早く洗い終わるとはー！

(せめて服は着てろよ、aign……)

がちゅつヒドアが開き、ぬつと金髪混じりの褐色頭が突き出される。

何てこつた。裏庭に出る時は着てた筈の上着、脱いじまつて。aignの上半身を覆つているのは、もはや金髪混じりの褐色の髪と、銀色のロケットのみだ。

「終わつたでー。」

のほほんと答えるその右肩に、からつじて畳んだ上着が担がれて

いるのが見えた。なるほど、洗濯する間、濡れないように脱いだか。で、そのまま戻つて来た、と。

ばーんと張つた胸板も、くつきり割れた腹筋も、何もかもフリー ダムに、オープンに。

一皿見るなり、少女は拳を握つてうつむいて、ふるふる震え出しだ。

しまつた、皿を塞いでさしあげるべきだつたか。

つてなことを考へて、ついでに、つかつかとダインに歩み寄つた。

「やあ、レディ・ニーハー・

「ひーいつ笑つてゐよ、あのビ天然が！」

「どうして、ヒーヒー？　ヒーヒーの店がわかつたなあ」

次の瞬間。

ふわっと水色のスカートが翻り、赤い靴がどかあつとダインの鳩 尾にめり込んだ。

「ふぐおつ
「あこつてえつー・」

たまらず、半裸の騎士は腹を抱えて床にうずくまつた。

素早く一コラの足は元通り、行儀良くスカートの中に収まつてい る。

いい蹴りだ。ただのお嬢様じゃなさそうだ。

に、したつてダインくん。ぬけぬけとレディの前に半裸で顔出す

とせなあ。よつこみつて、」のタイミングで。

「……えへ、弁護なし」

「ひじえ……」

ぱわり、とちびが床に舞い降りて、aignの膝に前足を乗せる。

「じーちゃん?」

「……ありがとな、ちび」

「じつあえずわいわと服来て来い馬鹿」

「くーー」

よれよれと立ち上がると、aignはちびを肩に乗せ、あーあーじ
奥へと引っ込んで行つた。

一方で、一ノラ嬢は耳まで真っ赤にして、ふるふる震えてじりり
やる。

そりやーまーせうだよなあ。いきなり男の半裸とか見せつけられ
ちや、なあ。

「……蹴つちやつた……aign、蹴つちやつた……」

「あ?」

そつちか。

「まあ良いんじやね?別に」

「ちよつと、すつきりした」

「じつや良かつた」

カウンターの口で湯を沸かし、ティーポットに茶葉を入れる。

薄くかちっと焼かれた白いカップを選んで「ぱぱぱ」と注いだ。

「どうぞ？」

「……何、これ」

「アップルティー。落ち着くぞ」

「いたくわ」

少女はカウンター前のスツールに腰を降ろした。見事だ。無造作にすとんと腰を降ろしているようで、その実スカートの裾も乱れず、動きの中に気品がある。

両手でカップを持って、じくじくと一口含み、目を閉じてしみじみと、あつたまつたリンゴと茶葉の香りを味わっている。カモミールティーにしようかとも思ったが、この年齢の子には、果実を使ったお茶の方がいいだろう。

それと、甘いお菓子も忘れずに。

木鉢に盛った丸いクッキーを差し出してみた。混ぜ込んだスペイスクの色で赤みがかつた褐色が強くなっている。

つーんとした爽かな香りは、リンゴの香りと酸味と仲良く溶け合いい、混じり合って、互いの味を引き立てる。相性がいいのだ。

「シナモンクッキーもどうぞ」

「ありがと……」

小さな丸いクッキーをぱしつとかじるなり、一瞬は皿を輝かせた。

「おーしゃー！ これあなたが作ったの？」

「ん？ ああ。昨日は暇だつたからな。」

四の姫はしみじみと手の中のクッキーを見つめた。

スパイスを混ぜ込んだクッキーをきれいに焼くのは、難しい。ちよつとでもオープンの火加減を間違えたら最後、あつと言ふ間に焦げてしまつ。かと言つて焼きが甘いと香りが引き立たない。生地は均一に練られ、絶妙の焼き加減だ。しかも厚みも形もきれいに揃つてる。

（可愛くて、胸もあつて、お菓子作りも上手だなんてーっ！ おじさんなのー。おじさんなのー！）

クッキーをつまんだまま、ふるふる肩を震わせる。

（私には無理だ……かなわないっ）

「うふ？ どうした？ 何か、妙なもん混じつてたか？」
「…………あるこ」

涙目でじとーっとじらみ付ける。

「は？ な、なんだよ急にー？」
「うーっ」

（くせこー、くせこー、くせこー）

ぱつぱつと猛烈な勢いでシナモンクッキーをかじり、アップルテ

イーで流し込む。

リンゴの香りのお茶は、ちょっとずつぱくって。砂糖も蜂蜜もはいっていないのに、ほんのり甘かった。

「……で、えっと…… ダインに会いに来ただけ、で、いいんだよな？」

（んな訳ないでしょー！）

口の周りにクッキーの粉をつけたまま、あつとんちんだ。

「ダインを取り戻しに来たのよー！」

だけど。

さつき、ちらりと見たダインの姿は、のびのびとして。騎士団の兵舎にいる時よつずつと、幸せそうだった。
ここにこるのが、どれほど楽しいのか。くつろぐのか。伝わってきた。

（）だから、彼を引き離すこととは、彼のためになるんだらうか？）

声から力が抜ける。がつくじと肩が下がる。

「取り戻すつて…… 何とも物騒な言い方だねおい」

「…………そのつもり………… だつたわ」

「いや、用事があるなら普通に連れてつてくれていいいが
「ちがうの。そうじやないのつー！」

用事なんかない。約束なんかしていない。これはただの、私のわがまま。彼を訪ねていったときはいつも、待っていてくれるって勝

手に信じてた。思い込んでいた。

それが叶えられなくて、怒って、慌てて押しかけてきた。

全て私の暴走。

最低。

「aignは、aignは『私の騎士』だからー。それが、それが男と恋仲になつたとか聞いてっ」

ぼろつと涙が零れる。銀髪の騎士から告げられた瞬間、胸の外側に刺さつたトゲが……今、やつと心臓に届いたみたい。

堅い殻を打ち破り、柔らかな滴があふれ出す。後から後からぼろぼろと。

「休みのたびに泊まり込んでるって……

「あ……なるほどなあ……」

差し出されたハンカチは、きれいに洗われ、やわらかく、お皿をまとラベンダーのにおいがした。

素直に顔を埋めて涙を拭いた。ついでにこっそり、鼻水も。

「まあ、懐かれては居るが、な

「いつから?」

「うーん、四ヶ月ほど前か。北の峡谷に、妖鬼の群が出た時があつたろ」

「……うん、知ってる

「あの時の討伐戦に、奴も参加してたんだよな。で、引き上げてくれる時に、会つたんだ」

この人は、私より先にaignに会つてたんだ。

私と会つた時、aignの心には既にもう、この人が居たんだ。だ

から、あんな風に笑えたの？

何の見返りも求めずに。何の欲も抱かずに。ただ私の前に跪き、
名誉のために戦つた。

「どうやって、知り合ったの」

「あいつが怪我してたから、手当てした……まあ、そんなところだ」

バカみたい。

最初っから、かなう筈なんかなかつたんだ……。

顔を拭つてる間に、一杯目のアップルティーが注がれていた。涙
を流したせいか、のどが乾いていた。
「ぐぐぐと一気に飲み干した。

「はー……」

リングの香りが鼻から咽を吹き抜ける。ひりひり染みた塩辛い痛
みが、ほんの少しやわらいだ。

「なあ、お嬢さん」

「二コラよ。二コラ・ド・モレッティ」

「そーか。俺は、フロウだ。それで、二コラ」

「なあに？」

「一人で来たのか？ 此処つて結構治安良くないキワキワなんだが

「きわきわ？」

「うん。あと路地の1、2本も曲がれば、スラム街さね

ざわわあつと背筋が泡立つ。

細い道から店の前を横切る道に飛びだした時。建物の影になつた
部分や、道と道の交わる角に、妙に目つきの鋭い男たちがたむろし

ていた、よつと気がする。

あの時はひたすら店しか見えていなかつたけれど……今思つと、彼らは確かにこっちを見ていた。

「ちょっと怖かつたけど。根性で来た！」

「根性つて……またえらいお嬢ちゃんだ」と

だつて、ダンの事で頭がいっぽいで、他のことなんか考える余裕なかつたんだもの！

【5】歸れと呼ばせて！

私の騎士を取り戻す。ここに来るまでの間、一ノハラ・ド・モレッティの頭にはそれしかなかった。

乙女の一念は燃え盛る炎となつて小さな体の内側にみなぎり、青い瞳からあふれ出し、裏町にたむろするゴロッキや不良少年など、寄せ付けもしなかつたのだ。

しかし。

「じうじう」と燃え盛つていた炎は、今やしゅうつと鎮火してしまつた。

「で、帰りはどうすんだい？」
「考えてなかつた一つ！　び、び、どうしよう」

さーつと一ノラの顔から血の氣が引いた。その途端、術具を収めたケースが、またカタカタと細かく振動を始めた。

「まあ、aignに送つてもうえは心配はねえな……つて、ん？」

フロウの目がスク、とわずかに細められる。間違いない。先刻の予感は今やはつきりとした確信に変わつていた。

「この子の感情に、術具が反応しているのだ。

「aignに、送つてもうつ？」

ぱつと一ノラの頬が赤くなる。その瞬間、またガツタン！と派手にケースの中で術具が跳ね上がり、ガラスの上蓋にぶつかった。

指輪やメダルといった比較的軽い物が、まるでフライパンで炒った豆のように跳ねている。

「……まあお嬢ちゃんって、魔術学院の生徒さんか?」「え?」

さよとんとした顔でニコラが首を横に振った。

「ううん、魔術なんて習ったことも使ったこともないわ」「…………ってことは、感情で漏れた魔力でこれが……」

フロウは秘かに舌を巻いた。

無意識にあふれ出す魔力でさえ、これほどの反応を引き起しきるなんて。この子が本気で術を使つたら、どれほどの威力を發揮するだろ?。

「え、何? 魔力?」

「うう……さよとん待つてる」

「うう……」本人は首を傾げていらつしゃるが、
術具の棚に歩み寄り、蓋に下ろしてあつた錠を開けた。途端に中味が力タ力タぴょいんっと飛び出してきた。

「おつと」

床に転がったのを拾い上げていると、ニコラが側に寄ってきた。

「何? これ……きれいー」

やはり年上^{じょうじょう}の女の子だ。この手のきらきらしたアクセサリーは氣になる^{うるさい}。目を輝かせている。

「梶包魔法（Packed magi）つってな……まあ、出来合^{しゆりあ}いの呪文一つを、装飾品に封じた奴だ」

「パックド・マギ……これが？」 実物は始めて見た！

「まあ、一つあたりの値段が半端ないし、な。街中じやああまり使う機会もなかろう」

元通りにケースの中に並べ直す、手の動きを少女の青い瞳が追いかけてくる。

「此處にあるのは市販品ばかりで、いまいち自衛には向かねえから……ああ、これがいい」

透き通った水色の石のはめ込まれた指輪を手に取った。キーとなる石はアクアマリン、地金は銀。流れる波と水を象った意匠が施されている。

「あれ？？？ 何だか、それ……」

ニコラが手をかざしてきた。

（お）

白いほつそりした指と、水色の石をはめ込んだ指輪の間に小さな流れができていた。

無論、普通の人間には見えやしない。魔術師が自らの意識をコントロールし、集中し、狙いを定めて始めて感知できる流れだ。

「懐かしい感じがする。見るのはじめてなのに。何で？」

「ああ。多分、お嬢ちゃんと相性がいいんだろうな」

この指輪を作ったのは、水の力を持つ魔術師だ。作り手の力は自ずと作り上げた物にも宿る。おそらく、この少女は水の力を秘めているのだろう。

「これは、いわゆる魔術の『発動体』って奴だ」

「魔術師の使う、杖と同じ？」

「そう、あれと同じだ」

「魔力に方向性を与えて、呪文を投射する手助けをしてくれる道具のことよね。無くとも使えない訳じやないけど、無駄な消費が増えるし、失敗する可能性も高くなる」

おやおや、大したものだ。魔術の仕組みをちゃんと理解しているじゃないか！

才能はあるけど、知識がからつきしな誰かさんとはえらい違いだ。

「わかつてゐなら話が早い。いいか、二口。今からお前さんに魔法を一つ教えてやる」

「え、え、うそ、ほんと？ 魔法教えてくれるの？ いいの、ほんとにいいの一つ？」

ほっぺたが真っ赤だ。ここに来てからは概ね赤かったが、今度のはちょっと質が違っている。田の輝きはさらに増し、はふー、はふー、はふーと息まで荒くなってきた。

「……簡単に身を守れるのを一つだけ、な……」

「うへへへへと派手につなずいた。金色の髪が広がり揺れて、まるで翼のようだ。

「え、あれ？ つてことは……あなた、魔法使いだったのー？」「ん？ あ～……そだな、一応。いいか、それじゃ見本見せるから」

右手を掲げて、軽く指を曲げた。手首にはめた木の腕輪を介して意識を集中する。

トネリコの木から削りだした腕輪は、使い込まれ、磨き抜かれ、品の良い飴色に染まっている。つやつやした表面には、花を模した印と魔導語が刻まれていた。

『内なる力よ 流れる力よ 集えこの手に……』

呪文の詠唱とともに、腕輪に刻まれた魔導語と印にそつて淡い光が走る。

空気が震え、手のひらに青白い光りが集まって行く。ぱし、ぱち、と小さな音を立てて。

『energy-ball!』

言葉とともに練り上げた魔力の玉を空中に放つ。あたかも鞠のように跳ね上がった青白い球体は、ぱあっといくつもの火花になつて飛び散つた。

ぱし、ぱし、ぴりり。

金属の部分に軽く青いスパークが走つた。

「す」……

「今やつたのは略式だ。本当はもうちょい威力のある呪文なんだが、それだと護身用を越えちまうからな」

「えーと、えーっと……内なる力よ 流れる力よ 集えこの手に
「……」

今唱えたのは、パックド・マギのために作られた、日常語で構成された呪文だ。

魔術師の使う『魔導語』や、主に聖職者の使う『祈念語』と違つて、ごく普通に会話で使われる言葉で唱えることができる。だからって。

「一発かよ」

「魔法理論の基礎は姉さまから教わったもの。後は、法則に基づいた言葉の組み合わせでしょ？」

「なるほど、下地はあるのか。なら良いや」

同じ騎士の家柄（あの見事な足をばきや教養の高さ、りんとした気性と行動力から察するに）でも、aignの家と違つて魔術に理解があるらしい。

おそらく王都ではなく、この西の辺境に領土を構えた家なのだろう。

古くから西の辺境では、魔術師と騎士が力を合わせて荒れ地を切り開き、蛮族や魔物の侵入から開拓者たちを守つてきたのだ。

「まあ、護身用だがあんまり人に向けて使うなよ？ 30回に1回は人を殺せるかもしけねえんだから」

「威嚇ね！」

「そう、威嚇だ。どれ、ちょっとやってみる」

水色の指輪を渡すと、二コリは頬を染めながらソリソリと薬指に始めた。指輪の帶びる力と少女の力が溶け合つ、結びつく。やはり相性は抜群だった。

すうっと息を吸い込むと、一ノコリは澄んだ声で囁き始めた。

『内なる力よ　流れる力よ　集えこの手に……』

間の悪いことってのは重なるもので。ちゅうじの瞬間、ドアが開いてaignが戻ってきた。

今度はきちんとシャツを着ている。

だがいにくと、彼の入ってきたドアは一ノコリの真正面だったのだ。やばいな、と思ったがまあ、所詮威嚇用の軽量版だ。ちょっとくらしげりはするが大したことにはなるまい。

なんてのんきに構えていたら。

『energy-ball!』
『energy-ball!』

「えつ」

おー。今、呪文唱える声が一つ聞こえたぞ。もう一個は、やけにぴやあぴやあした声で……。

慌てて見上げると、ちゅうじの真上にあたる梁の上で、翼を広げる黒褐色の斑の生き物が約一匹。金色の瞳を爛々と輝かせていた。

「ちびつ？」

やばい。あいつ、共鳴してるー。

「おわあーー」

ぱりぱりーっと強烈な火花が飛び散り、部屋の中の金属にぱりつと青白いスパークが走る。

ちびは『使い魔』だ。感情や思念、願いと言つた人間の『心の動き』に共鳴し、増幅する習性がある。当然、その中には魔術も含まれる。

意識してやつてる訳じゃない。動くものがあれば追いかける。それと同じだ。強い動きがあれば共鳴する。正に今みたいに。

きつちり一倍に増幅された炸裂雷球（energy-ball）の呪文を食らい、ダインはばたつと床にひっくり返った。

「おーい、ダイン。生きてるかー」「……しびれた」

球体の当たつた場所の服が破け、下からのぞく皮膚が赤くなっている。髪の毛の先つちょがくりんくりんに縮れてかすかに焼け焦げたにおいがするものの、命に別状はないらしい。

「ほんと、丈夫な男だねえ」「俺が着替える間に……一体、何が……」「うん、まあ話せば長くなる」

涼しい顔で治癒呪文を唱えるフロウの横で、ニコラがぽつりとつぶやいた。

「あ、なんかだいぶすつきりした」

最初の一撃にて『不運な事故』を招いたものの。

フロウの指導のもと、店の中で練習を繰り返すほどに精度は上がり
つて行け……。

西の空に日が傾く頃には四の姫は、自在に炸裂雷球の呪文を使い
こなすまでになっていた。

「よーし、上等だ。後は実践ある飲み、だな。筋がいいな、二口丼
！」

「ありがと、師匠！」

「し、師匠？俺が？」

面食らって田を見開くフロウは手を後ろで組んで首を
傾げて答える。

「さうよ？ だって魔法教えてくれたでしょ？」

「あー……なるほど、ね……確かにそーだ

フロウはほんのり頬を染め、人さし指でくしくしと口の顎の下を
かいた。照れ臭かったらしい。

「あー、そうだ、aign。そろそろ暗くなるし、二口丼を家まで送
つてやんな」

「ああ、元よりそのつもりだ。だけどその前に

のじつと背後からaignがひつひついて、肩に顎を乗せてきた。

「まだちょっと痺れてるんですが、『師匠』？」

すかさずフロウの手が、ペちつと額を張り倒す。

「おひよー」

続いて呴かれた言葉は、一ノ口ラにては馴染みの薄い言葉だったが、呪文などと詰つことは分かつた。ダンの皮膚にわずかに残っていた赤みが失せ、腫れが引いて行く。

（すごい……。あれを使いこなすには、もつと勉強しなきゃいけないんだ）

「つてえなあ」

叩かれたダンは首をすくめたものの、嬉しそうだ。田尻が完全に下がつて、口角が上がつてゐる。あまつたえゆるく開いた唇の間から、白い歯までのぞかせて……。

かちり、ヒーローの中でのロウの位置づけが切り替わった。

（わかつた。彼氏じゃなくて、飼い主だー）

「レディ、こちらへ……」

『私の騎士』が手を差し伸べてゐる。以前と変わらぬ、いやいやしさと優しさを瞳の中に秘めて。

「一ノ口ラと呼びなさい」

「へ？」

一の瞬間、四の姫は悟つたのだった。

（犬と飼い主に焼きもちやいてもしうつがないわ！）

わいぱつと言ひ切る。「アリヒ、フロウが声をかけた。

「まあ、あれだ……頑張ってくれな」

「うん、がんばる。それじゃまたね、師匠！」

満面の笑みで答える姫を、薬草師は田を細めて見送るのだった。
まるで光を見上げるよつこ滋しげに、蜂蜜色の瞳を細めて……。

【6】 こつかは。わね今は。

四の姫は騎士に連れられ、お座敷へと帰って行った。
夕闇迫る町の中、満面の笑みで意気揚々と、黒毛の軍馬の背に揺
られ。

「やれやれ、急に静かになつちまつたなあ
「ぴやあ」

しーんと静まり返った店の中でフロウはふうとため息をついた。
そもそも、さつきまでが騒がしかつたんだ。これが普通。いつも
の生活が戻ってきた、ただそれだけの事なのに。当たり前のはずの
静けさが、妙に、染みる。

「ひ……」

ちびがくしくしと顔をすり寄せてくる。

「こいつを置いていつたつてことは、aignの奴、今夜は兵舎泊ま
りになるかも知れない。

西道守護騎士団は、王都の騎士に比べれば魔術師への偏見はぎつ
と、薄い。

だが、皆の騎士自らがおおっぴらに使い魔を連れてくるのは、さ
すがにちょっと問題があるらしい。

aignが皆に務めている間、ちびは店に残されるのが常だった。
もともと自分が言いだしたことだ。『皆に詰めてる間、預かつて
やつてもいいんだぜ』と。

(いや、こ、こ、ちよつと待て、落ち着けフロウ。そもそも、あつち
があいつの本来の住み処だらうが！)

どうにもいけない。それもこれもダインの奴が店に来るたびに『ただ今!』なんて抜かすからだ。

自然といつちも『お帰り』とか答えちまつ。そう、『ひつしゃい』じゃなくて『お帰り』と。

(ただ今、 か
.....)

ちびが膝の上で伸び上がり、ふに、と前足で口元に触れてきた。
柔らかな肉球がくすぐついた。触れられた場所から顔がほころび、
笑みが浮かぶ。

「ああ、心配すんな、ちび。何でもない。何でもないから、な」

お返しとばかりに耳の後ろをかいてやN。ちびは田を締めて、じるいじのビードを鳴りした。

「なあ、ちび公。あいつら、なかなかお似合いの一人だとは思わな
いか」

「もう、一回だ」

明朗快活、豪放磊落、公明正大。光を浴びて常にまっすぐに突き進むあの素直な騎士さまにも、影がある。

待もしない。ただ、尽くすだけだ。

理由はいろいろあるが、煎じて詰めれば要するに……。

父親の正妻に、あの手この手で散々苛め抜かれて来た奴が（ダン本人は否定するだろうが）、大人になつたから、騎士だからって理由だけで、簡単に人を許せるだろうか。信用するだろうか？ つてことだ。

あいつが誰かの役に立とうとムキになるのは、筋金入りのお人よしになつたのは、利用されるより先に、自分から動いてきた結果に過ぎない。

そんな中で、初対面にもかかわらず、ちびは一囃子と共鳴を起した。つまり、ダンがそれだけあの娘に心を許してゐることだ。

「ちいとばかり跳ねつ返りで若干、若すぎないでもないがな。同じ騎士の家柄だ。俺よかよっぽつり合つてゐる」

「にー」

「魔術の才能もある。あの娘なら、お前さんのこと也可愛がつてくれるだろ?」……

「『ララ』なら、ダンの『田』を恐れたりしない。瞬時に見抜くはずだ。

呪いなんかじゃない。れっきとした魔術の才能なんだって。

（あのお嬢さんなら、きっとお前を幸せにしてくれる……）

いつしか太陽はそびえ立つ町並みの向こうへと姿を消し、薬草店の中は青みを帯びた影に塗りつぶされていた。

「おつと……」

ランタンに火を入れた。オレンジ色の明かりがぽわっと部屋を照らし、その一方で濃い藍色の影を落とす。何だか急に肌寒くなつて

きた。

「飯にするか」

「ひい！」

燭台に灯したロウソクを片手に、厨房へと引っ込んだ。
黙々とジャガイモの皮をむき、タマネギとニンジンを刻み、キャベツを切った。

スペイスと肉を合わせて炒め、まとめて大鍋に放り込む。水を注いで、束ねた香草を浸し、ぐつぐつ煮込む。ひたすら煮込む。いつも言つ時は料理が一番だ。ちょっととぐらに落ち込んで、でき上がる頃には気持ちが切り替わつてゐる。

一つの何かを『成し遂げた』達成感と満足感が、まとわりつくつすら寒い影を振り払つてくれる。

（ダイン。ダイン。お前はまだ若い。れつきとした貴族の息子で、前途有望な騎士をまだ）

（こんな口クでも中年男なんかとツルんでもしゃいけない。いけないんだよ……）

『フロウー』

所々に金髪の混じつた、ゆるく波打つ褐色の髪。始めて出会つた時は乾いた血がこびりつき、ぐつしょり濡れそぼつて見るも惨めな有り様だった。

『フロウー』

日に透ける若葉にも似た緑の瞳。その左には、魔術師ですら望んでも滅多に得られぬ『才』を秘めている。

生憎と奴の属する階級では恥わしい『呪い』と穢まれちやいるが、自分には分かる。

あれは、れっきとした力だ、才能だ。うつむくな、胸を張れ。できるものなら自分が欲しいくらいだ！

『フローワー』

団体がでかいぐせに、子供みたいに喜怒哀楽がはつきりしていて、些細な言葉でぐるぐると表情が切り替わる。

怒る。拗ねる。し�ょげ返る。涙を浮かべたり、はつふはつふと鼻息荒くして、しつぽ振つて駆け寄つて来て……

（ええい、くそ、何だつてあいつの面ばつか浮かんでくるんだか！）

「あ」

……てなことうだうだ考えてたら、うつかり大量にシチューを作つちました。

しかも、一シニク効かせてトマトと肉のがつり入つた、奴好みのを。

「ショーガねえなあ

かまどの火を落としてとる火にし、鍋の蓋を閉じて煮込みに入つた。

（やれやれ、何てこつたい）

今週いっぱい、居座る予定だったからなあ。食い物とか飲み物とか、いろいろ買はすぎちまつた。

中年男一人と猫一匹じや、食つ量なんざたかが知れてる。さて、どうしたものか。

深々とため息をついたその時だ。ぱたんっと勢いよく店のドアが開いた。

「悪いな、今夜はもう店じまいだよ」

むすりとした声でとつせに言い返す。考えてみりや酷い話だ。よろい匂はまだ下りしてないし、店のドアには開店中の札が下がってるんだから。ハツ当たりも甚だしい。

とりあえず客の顔だけでも見て置くか、と店内に立つとしたら……。

のっしのっしと重たい足音が近づいてくる。やれやれ、せつかちな客だね、いつまでも押しかけてくるなんて……。よほどせつぱ詰まってるのか。

「はいはい、今うかがこますよつと……わ

ぬううとばかでつかい図体が、目の前に立ちふさがる。

「フロウーー」
「ダイソウ？」
「ただ今ーー」

満面の笑顔で抱きついてきた。
ちくしょう、あつたかいなあ。ええ、シャクに障るつたらあつやしねえ。

「何で、お前、ここに？」

「一ノリは無事に屋敷に送り届けてきたからな。心配すんなー」

「いや、やうじやなくて、お前、兵舎に戻ったんじやないのかつ？」
「は？」冗談だろ。今週俺は非番だぞ？」

ぐんとおこをかいである。

「あ、シチュー作ったのか」
「……おつ。食つか」
「食つー食つー」

破顔一笑。

ぶんぶんと高速で揺れるふつとこじっぽの幻が見える。

「んじや、めずは店じまにしてからな」
「あれ、もつ閉めるのか」
「ん。今日は色々忙しかったからな……」

よひこを閉め、札を裏返して『Closed』と切り換える。扉を閉めてからじっかりと鍵をかけ、店の明かりを消して奥へと引っ込んだ。

「結局、今日の客は一コラだナだつたな」
「んー、まあ、ほんとあるさね……ん、熱いから氣をつけよ」
「やあやあー」

食卓に座り、向かい合わせで飯を食つ。ほんの四ヶ月前までは、想像すらしていなかつた。親子ほども年の離れた若い男と一人、毎日のよつー元に飯を食つなんてな……しかも自分の家で。

『あなた、aignとテキてるつてほんと?』

『……それ？』

何だつてあの時、彼女の問いかけをはぐらかしたのか。正直、自分でもよくわからない。

だが、これだけはわかる。

この笑顔も温もりも。一途に向けられるまっすぐな信頼も。

俺が……俺なんかが、独り占めしていいはずがないんだ。

いつかは手放さなければいけない。

そうとわかっていても。

(いや、だからいや)

嬉しそうにシチューを広お張るダインを見ながら、ひざの上のちびをなでる。

「うまいか

「うん、美味いっ

「いくらでも食べ。まだまだどうさりあるからな……

今、この瞬間だけは。

(四の姫と薬草使い／＼)

【6】 こつかは。やねひ今は。（後書き）

「J愛読ありがとう」「やれこました。
機会がありましたら、またいづれ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3799z/>

四の姫と薬草使い～恋敵はヒゲのおじさん!?

2011年12月19日12時48分発行